

創刊の辞

2007年、わが国初のESD (Education for Sustainable Development) 研究機関として、立教大学ESD研究センターが設立されました。以来、さまざまな実践研究、教材開発などを通して、国内およびアジア太平洋地域におけるESDの普及に努め、国内外におけるハブとしての役割を担ってきました。2012年3月、文部科学省オープン・リサーチ・センター整備事業による活動に一区切りつけ、同年4月以降は「ESD研究所」と名称を変え、文科省助成による時限付研究所から、恒常的な大学附置研究所として、新たなスタートを切りました。

2012年度以降は、これまでに取り組んできた「風土かふえ」や東京芸術劇場との連携など、立教大学による地域のSD (Sustainable Development) 化の具体化を図る西池袋地域におけるESDの実践的研究、国内各地でのESDの具体化に向けた実践的研究、HESD (Higher Education for Sustainable Development: 高等教育におけるESD) と立教大学内におけるESDとの連動、アジア太平洋地域において確立したハブ機能のより国際的な展開など、まさにUSR (University Social Responsibility: 大学の社会的責任) をベースに、5年間の成果の実質化と社会還元をめざした活動を展開していきます。

とくに2014年に日本で開催される「国連ESDの10年」(DESD)の最終会合にどう関わっていくのかという問題は、ESD研究の未来を考える上でも非常に重要です。この最終会合をオールジャパンで迎えるために、現在多くの方が尽力しています。たとえば、私が代表理事を務め、ESD研究センターも中心的な役割を担ってきた「ESDの10年・世界の祭典」推進フォーラムでは、文科省や環境省、ユネスコ国内委員会、国連大学高等研究所、アジアユネスコ文化センター、ESD-Jなど、ESDの主要なステークホルダーと連携しながら、開催準備を進めています。立教大学も含めた各大学が、2014年の最終会合を契機にESDにコミットしていくことが、その後のESDの定着、発展に大きく寄与するはずです。

また、東日本大震災からの復興・再生にESDの視点を取り入れていくことも、持続可能な社会の形成にとって極めて重要なことです。とりわけ、福島第一原発事故による被災者の支援や放射性物質の汚染除去、脱原発・再生エネルギーの推進などによる地域づくり、エネルギー教育などは、ESDとして正面から取り組むべき喫緊の課題です。現在ESD研究所でも、学内の研究助成制度である立教SFR (立教大学学術推進特別重点資金) の支援を受けたプロジェクト研究を通じて、福島第一原発事故の被災者向けESDプログラムの開発などの取り組みを進めています。

このような当研究所の活動を発信し、より広く周知していくために、このたび『立教ESDジャーナル』を創刊する運びとなりました。本誌はESD研究所の活動と研究所員や客員研究員などによるESD関連研究や活動の報告の場ですが、ESDを広く普及するというミッションも併せ持っています。このため、従来からの論文中心の研究紀要の体裁ではなく、ビジュアルで興味を持って手に取ってもらえる体裁としました。

立教大学ESD研究所長 阿部 治

2013年7月吉日